

# いちご一会とちぎ国体を終えて

報告者：小長谷 太作（島田高校）

2019 年茨木国体で優勝した後、2 年間新型コロナウイルス感染症の対策で全国大会が中止となり、3 年ぶりに今回の栃木国体が開催される流れとなった。国体に向けて動き出す段階で、GSA の中止、甲信越静の中止、後期リーグ 2、3 節の中止と、選手選考において非常に苦労した。具体的に動き出せたのは 11 月に入ってからであった。チームコンセプトの確認、どのような選手を育てていくのか、今選手にとって何が必要なのか、常にスタッフ同士で選手に目を向けて取り組んできた。静岡代表として結果を出すことにこだわるとともに、U-16 という事もあり選手の育成に関しても重要視し、個人戦術の理解とチャレンジすることを徹底して行い、それをチーム作りへと繋げていった。その中で、特に重要視したことを以下に挙げる。

## 【全体】

- コンパクトフィールド・・・Off the ball の動き（ポジショニング、スライド）  
選手同士の距離間
- 連続・連動・連携した動き
- ボールへの関わる
- 攻守の切替

## 【攻撃】

- ゴールを目指した受け方（体の向き）・・・攻撃の優先順位
- テンポ
- サポートの質（スピード・距離・角度）

## 【守備】

- 1stDF の決定・・・後方の選手の指示で動き出すのではなく、自分の判断で動き出す。その動きに対して後ろの選手が判断し連携を取る。
- 1 試合を通してのプレス
- コミュニケーション

以上のキーワードを常に選手たちに伝え取り組んだ。特に力を入れたことは、ポジション取りの修正である。自チームとは違うポジションでプレーする選手や、自チームで要求されている事とは違うポジション取りで苦労する選手が多くいた。常に選手間の距離を大切に、ボールに関わる時間を持たせるために off the ball の時に休んでいる時間をなくすことを意識させた。チーム作りとしては時間が足りない中、TRM や TR、ミーティングを重ねることで選手同士の距離間も良くなり、それにつれてゲーム展開やテンポもスムーズになっていった。チーム戦術を理解させるのではなく、選手一人ひとりに個人戦術を理解させ、気づかせたことがチーム作りへと繋がっていったと考えている。選抜として勝つために、時には型にはめるサッカーも一つの戦い方であると思うが、私は選手の判断を奪うようなサッカーはしたくなかった。負けてしまえばきれいごとになるかもしれないが、U-16 というカテゴリーで育成を考えると勝利だけに目を向けず、成長させながら勝利を目指すことを選んだ。約 1 年間、選手を見させていただき、本当に一人ひとり成長したと感じている。以前であるなら、静岡で選抜に選ばれる選手はそれぞれ自分の中で個人戦術を持っており、特徴のある選手が一つのチームになった時にとても大きな力を発揮し、組織となって結果がついてきていたように感じる。今後、育成年代で選手一人ひとりを育てる指導をより重要視していくことが静岡のサッカー発展に繋がっていくと感じた。

ここからは、前期リーグ、ミニ国体の結果と反省に触れたいと思う。  
まずは、以下が結果と得点経過である。

#### 国民体育大会第 43 回東海ブロック大会サッカー競技（前期リーグ）結果

第 1 節 v s 岐阜県 4 対 2	第 2 節 v s 三重県 4 対 3
13 分（静岡） 76 分（岐阜）	9 分（静岡） 69 分（三重）
19 分（静岡） 87 分（岐阜）	19 分（静岡） 70 分（三重）
24 分（静岡）	33 分（静岡） 79 分（三重）
51 分（静岡）	72 分（静岡）

#### 第 3 節 v s 愛知県 2 対 2

36 分（静岡） 89 分（愛知）
54 分（静岡） 90 分+1（愛知）

#### 第 77 回国民体育大会東海地区予選会（ミニ国体）

##### v s 愛知県 5 対 4

11 分（静岡）	27 分（愛知）
14 分（静岡）	32 分（愛知）
18 分（静岡）	41 分（愛知）
35 分+2（静岡）	60 分（愛知）
51 分（静岡）	

全ての試合において言えることは、先制点を取れていることである。逆に、課題としては全ての試合で失点もあるということである。今回、チームの特徴でもある得点までのボール展開では、試合を重ねるごとに見ても面白いと感じるようなパス回しから得点に繋がるものが多くあった。特に、GK からビルドアップの際、ミスをおそれることなく DF・MF に当て、DF から MF、MF から FW へ積極的に縦パスを入れ、得点まで繋がるケースが多く見られた。得点に繋がらなかった時でも、選手同士の距離間が良かった場合は、連続・連動・連携がスムーズに判断でき、テンポよくボールを保持する時間も増え、攻撃ができていた時間が増えていった。特にボランチのバランスが試合を重ねるごとに成長し、攻守ともにチームの柱となっていった。

課題としては、前期リーグでは、90 分ゲームの中で特に 70 分過ぎからの失点であり、有利な状況での試合展開を理解させられなかったことと、交代選手の起用方法が原因と感じている。試合展開として優勢な時、時間を作るためにロングフィードやボールをキープすることだけを選択するのではなく、ボールを奪われない方法を選択させたかった。試合の中で、常に劣勢に試合が進むことはない。うまくいかない時間帯、相手に流れが行っている時間帯こそ、落ち着くためにまずはボールを奪われないこと。そのために、チームとして大切にしていた選手一人ひとりのポジショニングの修正が必要であった。試合展開でうまくいかない時は、選手同士の距離感が遠くなっている時や、ボールを受けに行く選手の体の向きが前向きでない時であった。

また、選手招集においても課題があった。例年バックアップメンバーも含め、ラージグループとして多めに選考候補の選手を招集しながら取り組んでいるが、今回は新型コロナウイルス感染症の関係や怪我、自チームでの活動などある程度絞られた人数で活動となることが多かった。私個人としても、リーグ戦や TRM、TR 等に足を運び選手を見に行かせていただいたり、スタッフ間で手分けをして多くの試合を見に行ったり、情報を共有しながら選手の様子にアンテナを立てていたが、思い通りの選手招集に繋がらないことが多かった。

最後に、本大会について触れたいと思う。

結果と得点経過は、以下の通りである。

いちご一会とちぎ国体

v s 新潟県 2対3

65分（静岡） 4分（新潟）

70分+4（静岡） 27分（新潟）

60分（新潟）

本大会を迎えるにあたって、最も苦労した点は、やはり選手選考であった。代表への招集、怪我、新型コロナウイルス感染症の関係、チーム事情とミニ国体までのメンバーとは変更せざるを得ない状態で、さらに中心となってきた選手が参加できない状態となってしまう、16人そろっての準備が不十分で、大会当日まで16人がそろうのかという不安を持ちながら大会に入った。事前合宿では、再度チームコンセプトと、セットプレーの確認を重点的に行った。本大会までの試合は重要視していた、先制点を取ることができていたが、これからの試合は思い通りにはいかない、先制点が取れないこともあると思うので、試合の状況によって判断を変えることも重要であることも伝えた。そのために、再度ポジショニングの重要性について確認を行った。結果が出た後振り返れば、タラレバで考えることはあるが、大会当日までは、自分としてはやれることはやったと感じていた。

試合の展開としては、4分（失点）・27分（失点）・60分（失点）・65分（小竹得点）・70分+4分（野澤得点）であった。試合の入りとして、思った以上に守備に対してのプレスが弱く、少し構える形となってしまう、選手同士の距離間も良くなかった。そして、重要視していた先制点も奪われ10分まで落ち着かない時間が続いた。その間、決定機も2度あったが、決めきることができず、再度失点につながってしまった。前半を0対2で折り返し、ハーフタイムでは、とにかく選手に自信を持たせること、交代選手も常にいける準備をしておくこと、そして後半から2トップにすることで、攻撃の選択肢を一つ前にすることを伝えた。前半に比べ、後半の入りは良かったが、なかなか得点に繋がらず、その中でペナルティエリアの外でブロックに行った選手に当たりボールの軌道が変わって失点してしまった。今までにない0対3という試合展開で、選手たちの雰囲気は一時沈んでしまったが、65分にDFの関戸（静岡学園）からFWの小竹（清水エスパルス）へシンプルにロングパスが渡り、得点に繋がった。そして、アディショナルタイムにもFKからMFの野澤（浜名）が直接決め2対3となったが、ここで試合終了となった。35分という短い時間の中での、先制点の重要性、1点の重み、試合の入り方など、分かっているけれども伝えきれなかったことに責任を感じている。初戦敗退という結果になってしまったことに対し、今まで感じたことがないくらいの罪悪感を抱いている。静岡県の代表として、監督として責任を持ち、連覇を目指して約1年間取り組んできたからこそ、その重みを感じている。

今後の静岡のために、国体として静岡として必要だと感じたことを挙げさせてもらう。

- ・ 2種、3種、クラブとの連携
- ・ リーダーシップの取れる選手の育成
- ・ 若手指導者の経験の場（CSとの関わり）

最後に、活動に当たり（一財）静岡県サッカー協会をはじめ、多くの関係者の方々に協力していただき、また、高体連、クラブと選手を派遣して下さったチーム、TRM等で協力して下さったチームに心より感謝申し上げます。今回の悔しさと経験を今後の静岡県のサッカーに繋げていけるよう、もう一度サッカーと向き合っていきたいと思います。

ありがとうございました。